

北海道のイヌ

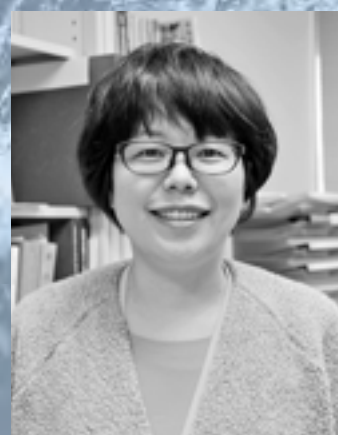
イヌに対して親しみを感じる人は多いだろう。私も幼少期にイヌを飼っていたことがあり、今でもイヌが大好きだ。私のようにイヌを飼った経験がなくても、「イヌ=身近なペット」との認識は現在広く定着している。ここでは、あまり知られていないが、現在とは異なる形で人と深く関わってきた北海道史上のイヌについてみていこう。

イヌの歴史

イヌの先祖がオオカミであったことはよく知られている。しかし、どの種類のオオカミがいつ、どこで、どのように人に慣らされ、イヌになっていったかは、近年、考古学や遺伝学などの分野で精力的に探究されながらも、未だ結論を得るには至っていない。しかし、日本列島外ですでにイヌ化した後に、遅くとも縄文時代早期までには列島内にイヌが現れたことは、神奈川県なつしま夏島貝塚や愛媛県かみくろいわいわけ上黒岩岩陰遺跡から出土したイヌの骨から明らかである。この頃にはすでに、列島を取り囲む多くの海峡が形成されていたため、イヌは人に連れられて海を渡ってはるばるやって来たことになる。このように、イヌは、日本列島内に初めて足を踏み入れた当初から、人と深い関係を築いていたといえるのだ。

北海道でも、縄文時代以降、イヌの骨が各地の遺跡から出土し始める。縄文時代には、埋葬されたとみられる出土例や骨がばらばらになった状態での出土例があるが、例数はあまり多くなく、イヌの存在感はそれほど大きくはなかったようである。

続く縄文時代への移行期が、北海道におけるイヌ利用史の画期となる時期である。この時期、礼文島や利尻島、釧路市で、イヌの骨が多量に出土する遺跡が突如現れる。これらの遺跡で出土するイヌはまだ若く、乳歯しか生えていない個体や永久歯への生え換わり途中の個体、永久歯が生え揃ったばかりの個体で占められ、老犬は全くと言っていいほど見られない。加えて、これらのイヌはいずれも骨がばらばらの状態で見つかり、なかには刃物でつけられた痕が残る骨もある。以上のことから、これらのイヌは人によって殺され、解体され、食べられたと推測される。もちろん、



これより以前にも骨がばらばらの状態で出土した例はあるため、この時初めてイヌが食べられるようになったわけではないが、これほどまでに集中的にイヌが食べられている様子は日本列島全域を見まわしても過去に例がない。なお、イヌが若いうちに食べられているということは、裏を返せば、イヌが生前に猟犬などとしては利用されなかったことを意味している。

食料としてのイヌ

イヌ好きにとっては耐え難い話題かもしれないが、日本列島を含めて、歴史上、イヌが食べられた例は枚挙にいとまがない。しかし、イヌは猟犬や番犬、愛玩犬など、生前に担える役割が多く、食べることをおもな目的として飼われていた例は珍しい。縄文時代への移行期に、北海道の一部地域で、イヌが突如多く食べられるようになった背景には一体何があるのだろうか。

イヌは体がそれほど大きくなく、肉量は少ない。味については人それぞれの好みがあるため評価しづらいが、ウシやブタに比べて、食料としてあまり優れているとは言い難い。しかし、人への従順さや雑食性とい

利用史

内山 幸子 (うちやま さちこ)

東海大学札幌教養教育センター准教授

山梨県甲府市生まれ、静岡県浜松市育ち。筑波大学大学院歴史・人類学研究科単位取得退学。博士(文学)。主な著作に『イヌの考古学』(同成社)がある。

う性質からくる飼いやすさは、現代より低い技術しか持ち合わせていなかった時代に厳しい環境下を生きた人々にとって、魅力的に映ただろう。また、特に礼文島や利尻島といった離島では、猟犬を使った陸上での狩猟がそもそも行われにくく、島内で得られる食用の動植物も限られる。仮に吹雪で何日も島内に閉じ込められるようなことがあれば、手近にいるイヌを食べることは、いたって自然なことのように思える。

さらに、日本列島外に目を転じると、この時期にはサハリン中部でもイヌを多量に食べたとみられる遺跡が複数現れている。これらの遺跡は、出土する土器の形や模様の類似性から、より北に位置するアムール河河口部との強い関連性が疑われ、以前からイヌを食べることが常態化していた大陸から、「イヌ=食料」という認識が、アムール河河口部、サハリンを経由して日本列島にまでもたらされた結果、一気にイヌの食用化が進んだ可能性がある。

なお、時期は少し下るが、日本列島と朝鮮半島とを結ぶ地点にある^{いきのしま}壱岐島でも、弥生時代の遺跡で同じようなイヌの利用状況が確認されている。このことから、

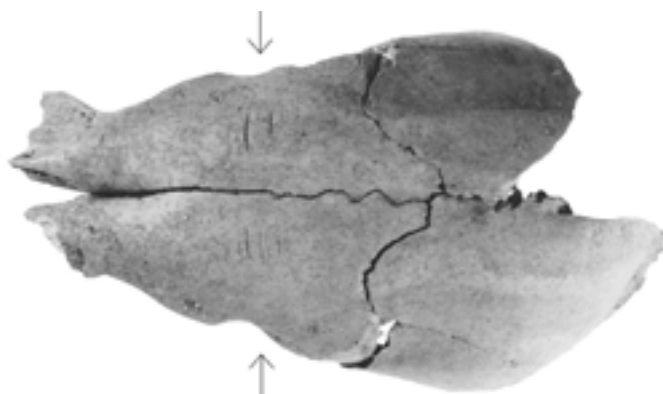
大陸から日本列島へと、北周りのルートだけでなく、南周りのルートでも、イヌに対する新たな価値観の流入が起こったとみることができる。

多くの役割を担ったアイヌ文化期のイヌ

続縄文時代への移行期に一部地域で突如現れたイヌを食べる習慣は、道内のオホーツク海沿岸域やサハリン、千島列島にかけて分布したオホーツク文化期にも引き継がれた。しかし、これに併行する擦文時代には、イヌの出土例がまだ少なく、オホーツク文化期とはイヌの扱いが大きく異なっていたようである。

アイヌ文化期のイヌについても出土例がまだ少ないため、擦文時代と同じく、現時点ではイヌを積極的に食べる習慣はなかったとみてよいだろう。なお、北海道やサハリンのアイヌの人々の様子を描いた「アイヌ絵」のなかには、イヌが人とともにクマ狩りやシカ狩りをする様子や、^{そり}橇や舟を曳く^び様子のほか、人がイヌに餌を与えたりイヌをおんぶしたりする様子などが見られる。サハリンでは、イヌ橇具の一部とされる木製品も出土しており、アイヌ絵の表現と合わせて、当時のイヌが人のパートナーとしての役割を担っていた可能性は高い。一方で、『北夷分界余話』にあるように、イヌの肉が食べられたり、イヌの皮が利用されたりすることもあり、当時のイヌが担った役割の広さがうかがわれる。

以上のように、擦文時代とアイヌ文化期では、続縄文時代の一部やオホーツク文化期とは明らかに異なる人とイヌとの関係性が築かれていたようである。イヌに関する考古学的証拠はまだ少ないが、近年は発掘調査も進んでいるため、両者の関わりについてより深く掘り下げていける日はすぐそこまで来ている。



刃物の痕跡が残るイヌの頭蓋骨